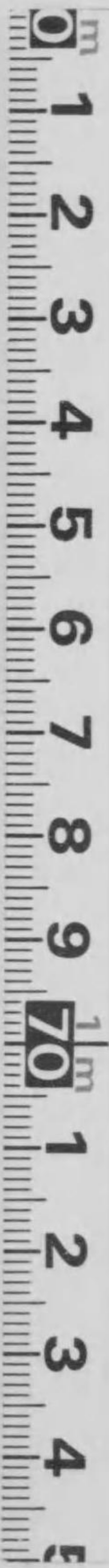




279

36



始



學習法

長崎縣大村高等女學校

13513
42

279-36

學 習 法

目 次

理 數 地 歷 英 國 教 修 一 學 理 史 語 語 育 身 般 科 科 科 科 科 科 科 科 得	【七】
.....	【六五】
.....	【五八】
.....	【五一】
.....	【四】
.....	【八】
.....	【六】
.....	【三】
.....	【一】

大 正
10 6 2 0
內 交

法制經濟科	[九]
圖書科	[九五]
家事科	[一〇]
裁縫科	[一〇六]
音樂科	[一〇八]
体操科	[一一]



學 習 法

學習上の一般心得

- 一、一度知識の斧を研かば如何なる木材も砕くべく、一度精神的筋力を發達せしむれば如何なる重物も之を上げべく、一旦心の修練を遂ぐれば如何なる人生の事業も之を成すことを得べし。
- 二、自學を重んぜよ、自學には相當の苦しみを感ず其の苦しみは自修に伴ふ抵抗の感にして發憤努力を生ずる原因なり。
- 三、全能力を遺憾無く發揮せよ、而して其の好機會は自由なる自學自修の際にあり。
 - 1、豫習の際には教科書を熟讀して主要なる點を推定し疑義の點を發見し置くべし
 - 2、復習の際は教材の主要點を概括し且つ其の知識の活用上に迄考を及ぼすべし。
 - 3、技能科は特に練習を重んずべく放課後の時間の利用を工夫すべし。
- 四、各題材の任務及び價值を適確に認知すべし。

- 五、獨立思考に依らざれば徹底的の理會は得難く、自發見したる知識技能にあらざれば價值少し。
- 六、授業中は學習態度を活潑にして重要な疑義は遠慮なく質し深究に努むべし。
- 七、發表の修練を重んずべし發表練習の結果は
第一に自己の思想を明白整然たらしめ。
第二に自己の思想を正當に他人に傳達し得べき力を得。
第三に他人の發表を容易に確實に理會收得し得るの力を進むればなり。
- 八、讀書力を養へ、卒業後に於て自智能を磨き品性を向上し得る素力としては、實に讀書力大部分を占むればなり。

學校の圖書室を活用せよ。

カーライル曰く「總ての時代の精神は書籍の中にあり」。

ラスキンは曰く「良き書籍を讀むは優れたる人ばかりの社交團に入るが如し」。

修身科

第一 學習の目的

修身科を學ぶ目的は自己の良心を養ひ道德實踐の方法を明にして、善良なる品性者たらんがためなり。

第二 學習上の注意

- 一、修身は實行によりて初めて其の意義を有するものなれば、徒に道德上の知識を蓄ふるのみにては効なし、宜しく實踐躬行に努むべし。
- 二、學習事項は之を社會の實狀に照し自己に反省して充分なる理會を得んことを心掛くべし。
- 三、教育勅語並に成申詔書は身を修め世に處するの道を示し給へるものなれば、其の御趣旨は充分に理會すべきのみならず、學習事項は之を勅語詔書に歸結すべく、且つ勅語詔書は誦誦請寫し得るに至らんことを要す。

- 四、時代の趨勢に鑑み貞淑温良にして堅實なる精神を養ひ、一層本邦女子の長所を發揮すると共に理解力ある有爲の婦人たらんことを心掛くべし。
- 五、人情に厚くして祖先を崇拜する等の地方美風は益之を發揮すると共に一層進取的の精神を養ひ以て地方の發展を圖らんことを期すべし。
- 六、自己の長短を知り、長所は之を發揚し、短所は之を矯正せんことを心掛くべし。
- 七、不斷の注意によりて道徳上の常識を養ふべし。
- 八、格言並に修養上に關係ある詩歌等は其の含蓄する所を充分に玩味し、尙之を誦讀して反省の資とすべし。

○作法學習心得

- 一、儀容を端正にして温和ならんことを要す、頭髮、衣服等總て清素を旨とし己が品位を保たんことを要す。
- 二、禮の精神を重んずべし言語動作等真心より出で、假にも虚禮に流るゝことあるべからず。

三、作法の形式は左の諸項に叶ひたるを採るべし。

- 1、一般に通ずるものたるべし。
 - 2、對者に適當なるべし。(貴賤、老幼、親疎、男女、外國人等)
 - 3、場合に應相すべし。(吉凶、季節、場所等)
 - 4、時勢に應すべし。
 - 5、衛生的なるべし。
 - 6、經濟的なるべし。
 - 7、合理的なるべし。
- 四、作法室以外に於ける適用を重んずべし即ち教室、寄宿舎、家庭及び外出先等にて應用宜しきを得んことを心掛くべし。

教育科

6

第一 學習の目的

將來母親となり或は人の師となりて子供を育て教ふる重き任務を有すべきものが、教育の學理を研究し其の活用法を學び、且つ母として教育者としての精神的修養をなさんが爲めなり。

第二 學習上の注意

- 一、常に學說全系統に注意し現在學習しつつある部分は全体に對し如何なる任務を有する部分なるかを明にすべし。
- 二、學理と實際とは楯の兩面の如く表裏して離るべき者にあらず、教育の學理は教育の實際を指導すべき規範にして教育の實際は學理を生む基なり、故に教育を研究する者は學理は之を實際に照すべく、實際は之を學理に合せて攻究を進むべし。
- 三、學術上の用語は明瞭に其の意義を了解し、使用上不自由なからん事を期すべし。

四、國民道德の大義を明にして、國民教育の目的を明にすると共に、心理學、論理學、生理學等の根據に立ちて教育方法上の見識を練るべし。

五、心的現象は常に内省と觀察とを怠らざると共に卑近なる實驗に訴へて明確に了解せんことを力むべし。

六、母となり教師となるべき立場よりの教育研究が一面に於ては即ち自身の修養なることを忘るべからず。



國語科

8

第一 講讀科學習の目的

講讀科學習の目的は普通の言語文章を了解し、正確に且つ自由に思想を表彰するの能を得、併せて文學上の趣味を養ひ、知徳の啓發に資し、尙ほ我國民固有の感情に觸れ、以て國民生活の仲間入りするにあり。

第二 講讀科學習上の注意

- 一、豫習法。何學科に限らず、自學獨習する事は最も肝要なれば、充分の時間を費して反復誦讀し、自ら種々の發見をなさざる可らず。尙ほ難解の語句は、様々に思考して二三の意義を想定し教師の最後の批判によりて之を會得すべし。斯くする間に無限の妙味をさとり、推理力を養成し、卒業後に於ける自學獨習の端緒を得て、大に讀書力を増進するものなり。
- 1、通讀。文の大意を把握すべし。

- 2、抜き書。難文字難語句の意義を書き抜き、辭書を用ひて推究すべし。
- 3、精讀。推讀推解すべし。

(イ) 内容の要點把握、段落の中心思想を表解し、全篇の主想を決定すべし。
(ロ) 形式上の特點を見出すべし。

即ち記事文、敘事文、説明文、議論文、韻文等の區別をなし、説明文、議論文等の如く表解の必要あるものは之をなすべし。

(ハ) 作者の苦心點、力癆の入れ所等に注意すべし。

- 4、内容主義。辭句の解釋に、餘り困難を感ぜざる文章にありては、先づ内容の概要を知り、然る後に形式に入るをよとす。即ち思想を先にし言語を後にすべし。
- 5、形式主義。内容形式の稍々困難なる文章に於ては、形式即ち辭句の解釋、文の構成等を先にし、内容を後にするを便とす、何となれば、此の方式は讀みつゝ考ふる習慣を生せしめ、讀書力を増進すればなり。
- 6、音讀する場合、多くは殆ど機械的に空讀する惡癖あれども、こは甚だしく講讀

の目的を阻害するものなれば、一字一句、文字を辿りて正確に意識的に讀まざる可らず。

10

7、修身、地理、歴史、理科等の他學科に關係あるものは、之と聯絡して研究すべし。

8、辭書。語句の解釋用には、漢和大辭典、言海、辭林、ことばのいづみ、故事成語大辭典、諺語大辭典、大日本國語辭典。

人名には、人名辭典。

地名には、地名辭典。

其の他の雜事には、百科辭典。

二、授業法。馬を水邊に連れ行く事は一人にてもなし得れども飲むを欲せざる馬には十人かゝるとも飲まする事を得ず、との譬あるが如く、自ら研究する心なき者は、教授の効、極めて少なきが故に、學習者たる者は、必ず發動的態度ならざるべからず。

(一) 朗讀。

1、讀み方は、單に精神的生活を離れたる獨立の技能に非ず實に、其の學校に於ける全陶冶の結果として見るべきものなれば、生徒の讀み方の如何は直ちに其の學校一般の状態を推定せしむる標準となるものなり。然れば正しき姿勢と眞面目なる態度とを以て、正確に明瞭に讀まざる可らず。

2、講讀に於て、素讀と講義とを區別せしは、從來の通弊なり。讀書本來の目的は、讀みて直ちに其の意を悟るべきものなれば、讀みつゝ其の意義を考ふる習慣を養はざるべからず。

3、口語体の文章を讀むには通常の話口調に讀み、文語体の文章も、亦成る可くこれに近き様に注意し、始めは文字を辿りて讀む所謂機械的讀方より漸次、理會的讀み方に進み、終に巧みなる審美的讀み方にまで達するやう努力すべし。

4、朗讀の要素。文章を論理的に理解し、且つこれを傳ふるためには、正確明瞭に讀み審美的に玩味鑑賞しつゝ之れを傳ふる爲めには、語調態度音聲に注意せざる可らず。

11

- 5、朗讀を正確にする爲めには、發音を正しくし、方言訛音を去り、アクセントを正確にせざる可らず。
ラダ、ロド、シヒ、イエ等の發音上の區別の如きは、特に注意すべし。
- 6、讀者自身が何を讀みつくあるかを理解し、主要語句に至りては、注意を集むる爲めに語勢を強くし、適當の場所に於て斷讀し、尙ほ語尾を不明にせざる様注意すべし。
- 7、審美的に傳ふる爲めには、昂進の情を表はす時には、高調にし、悽愴恐怖の情を表はす時には低調にし、激烈なる情を表はす時には強調に、温和親切の情を表はす時には弱調に、緊張急迫の場合は速調に、弛緩失望の場合は遅調に讀むべし。
- 8、態度も餘り態とらしからざる程度に自然的に伴はせ、聲色も、文章に表はれる男女長幼等の各人物によりて、適度に異ならしむべし。
これを要するに、以上の各要素が朗讀心理過程たる、視る讀む、内容を想ひ浮

ぶることの三成分協働の際に、ピッタリ當てはまらざれば、朗讀の任務は充分發揮する事はす。

(二) 意義の話方

- 1、正しき姿勢と眞面目なる態度と十分なる音量とを以て、臆面なく、趣旨を明瞭に首尾貫徹する様、發表すべし。
- 2、直譯的、日常の言語と、甚だしく其の構造及用語を異にする文章、或は特に必要なる場合、又は困難なる形式の部分に於ては必ず一應、直譯的に正確に發表すべし。
- 3、意譯的字句に拘泥する事なく、其の内容を、自己の言語を以て發表する事なり、即ち詩歌、韻文の如きは始め直譯的話方を應用したる後、意譯的話方を以て、適當の修飾と表情とを以て、活潑に自由に發表すべし。
- 4、國語科の主要なる目的は、他人の言語を聴き、或は文字文章を讀みて、其の代表する意義思想を正しく領得する所の言語的智識と、言語上、文章上の記

號を正しく使用して、巧みに自己の思想感情を表出する所の言語的技能を領得するにあり。

- 5、右の目的に附隨して最も重要な目的は、智識を擴張整理し、感情意志を修練して、國民的志操を涵養するにあるものなれば、言語的智識と言語的技能を領得するのみならず、知徳の啓發と感情意志の修練とに資せざる可らず。
- 6、文章は、内容と形式との連絡を密にし、知的分解をなすと共に玩味鑑賞すべきものなれば、單に一字一句の意義にのみ拘泥する事なく、文の大意を掴み、其の眞意を了解し、作者の精神をも發見せざるべからず。
- 7、教材には、畧ぼ語學的のもの、文學的趣味に關するもの、修養に關するもの及び、知的のもの等の別あるを以て、其の何れに屬するかにより、各々其の態度を異にし、其の目的に伴ふ様研究すべきなり。
- 8、標準語により、方言訛音を十分に矯正し、明瞭正確なる發音節調語法を領得すべし。

- 9、漢字は出來得る限り正格に記憶し、國語假名遣をも誤らざる様領得すべし。
- 10、語法及文法は、具体的に其の實例を、讀本又は作文談話等の材料に求めて、機械的ならざる様、實際的によく了得すべし。
- 11、他生の朗讀し發表する場合は、果して誤りなきか、自己の意見と異なる所なきかに深く注意し、若異なる所ある時は、遠慮なく自己の意見を發表して大に活動し、互に推究すべし。
- 12、記事文を解釋するには、知的のものは直觀的に觀察的に取り扱ふべく、情的のものは、主觀的に、其の情趣をよく味ふべし。
- 13、叙事文は、時、場所、主人公、事件の四要素を具備するが故に、總じて主人公の性格を想像し、事件の推移に最も力癩を入れざる可らず。
- 14、説明文は、物の條理性質を説き明かしたるものなれば、表解して、其の條理を明確に了解せざる可らず。
- 15、議論文は、凡そ序論、説話、論證、結論の四段の組織よりなるものなれば、此の

四段に表解して其の論旨を十分に納得せざるらず。

16

16、抒情文は、作者が其の喜怒哀樂の真情を寫し出したるものなれば、餘處事ならず感じ、主人公に同情して讀まざる可らず。

17、韻文は、作者が美的感想を發表したるものにして、整美せられたる聲調を有するものなれば、先づ其の文字語句の意義と内容の大体とを明瞭にしたる後、大に想像を逞うし、或は具体化して其の趣味をよく鑑賞し、最後に、何回も諷誦朗讀して、其の形式たる溫雅、優美、雄大、悽愴、悲哀等の聲調を玩味せざるべからず。

18、要するに、國語學習の態度は、稍もすれば分解的断片的に、文字語句そのものみの取扱に偏して、其の言語文章の表はせる全体的思想感情を了解する総合的理解、即ち讀書力の涵養に十分の意を注がざる傾あり。

此の兩者の目的任務は、その何れにも偏する事を得ざれども、終極の目的より言へば、断片的分解的理解は、総合的理解の準備方便たる事を忘れず、前

者に傾かざる様注意すべきなり。

三、復習法。復習により、始めて智識は確實となり、理解は正確となり、記憶は強固となりて、眞の疑問と追求的の興味とを生ずるものにして、學習の効果を確實にするものなれば、授業時に得たる記憶の薄らかざる當日に於て必ず實行せざる可らず豫習復習は、誠に無二の良師なりと知るべし。

1、先づ通讀すべし。

2、意義の話方練習をなすべし。

3、難文字を記憶するには、唯視覺に訴へたるのみにては不十分なるを以て、必ず數回書き試むべし。

4、難語句は、之れを使用せざれば會得し難きが故に、種々に使用して短文を作り見るべく、類似の文字語句は誤り易きを以て、之を比較研究すべし。此の方法は、其の語を眞に理解し、作文力を増進するものなり。

5、發音、假名遣を正確に會得する爲め、五十音圖を利用すべし。

17

6、形式吟味の要點は

(イ)、各節の大意把握。

(ロ)、全課の大意把握。

(ハ)、表解により要點摘出。

(ニ)、伏在せる思想を表面に指摘。

(ホ)、玩味鑑賞。

7、内容の吟味。

(イ)、理會的に讀みつゝ内容の要點を窺ひ、本文の眞意を掴むべし、

(ロ)、何回も審美的に朗讀しつゝ玩味鑑賞すべし。

8、豫習時の研究が、果して如何なる程度にまで正確なりしか、又如何なる點を誤り居たりしかを考へ、益々興味を起して勤勉努力せざる可らず。

9、讀本の文章中、有益なる教訓、又は優美高雅なる美文韻文等は、能く之を消化したる後、適當なる分量だけ誦誦すべし、何となれば、此の方法は確に讀書の基

礎として、又た作文の基礎としての理解並に鑑賞の實力を養ふ者なればなり。

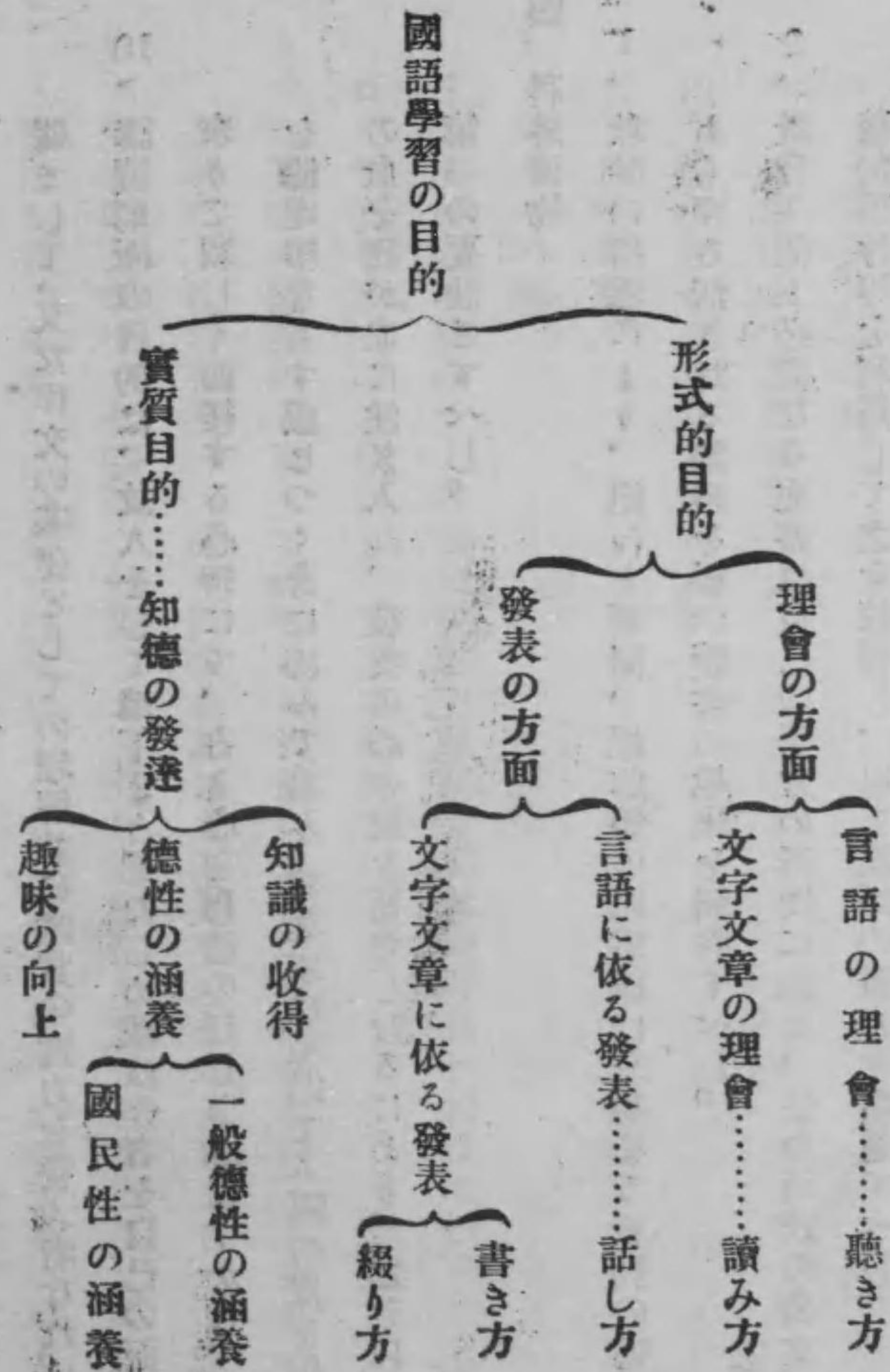
10、講讀窮極の目的は、故人をして地下より起たしめ或は作者を自己の面前に連れ來りて親しく面接する心持にて、古き心を自己の新しき心に生かし、他人の心を餘處事ならず感じつゝ身に泌みて讀み、言葉或は境遇てふ隔の皮を剥ぎて、彼の血を我が血に注ぎ入れ、彼我の心の泉を通せしむるにあり。之を以て讀書道第一の要訣とすべし。

四、科外讀物

1、教師の指導により、絶えず新聞、雜誌等の記事或は有益なる新刊の書物を讀みあらゆる活きたる知識を得、讀書の趣味を涵養すべし。

2、社會生活上必要なる文書は自己の學力の程度に應じ、法命通達の公文、或は偶發的事件等を利用して之を練習し、以て國語の實力を増進すべし。

一、國語學習目的の表解



二、人類と言語。

「言語は實に吾人と獸類とを分つ境界にして、獸類の決して越ゆる事を得ざるルビ
 コン河なり。」とのマクスミュラーの意義深き言葉をよく玩味し、益々言語文字文
 章の研究を進め、以て人生の地歩を高むべきなり。

三、國民的教科としての國語。

國語は、歴史的に成立し發達せる我が民族特有の言語にして、嘗に我が國民生活
 上必要缺く可らざるのみならず、又我が民族獨特の性格感情、所謂國民性を包蔵し、
 獨特の文化を含有する貴重なる精神的寶庫なるが故に、之を學習することにより、
 我が民族間に於ける思想交換の記號を知悉し得ると共に、又國民的志操を養成し、
 國民の仲間入りをなす事を得て、國家の獨立と國民の統一とに最も有力なる後援
 を與ふるものなり。是を以て近世の文明諸國は、孰れも皆な國語を以て普通教育
 上最も重要なる教科となせり。是れ實に國語が國民的教科たる所以なり。

四、基本的教科としての國語。

何事を學習するにも言語、文字、文章の媒介に依らざるはなし、故に國語の力充分ならずしては、すべての學科の上達は得て期すべきにあらず、此の意味に於て國語科を基本的の教科と云ふ。

第三 作文學習の目的

作文學習の目的は、既に領得せる國語上の知識を應用して自己の思想を正確明瞭に表出する能を得、更に獨創的精神を涵養するにあり。

第四 作文學習上の注意

- 一、文章の基礎的四要件。
 - 1、精確。作者の本意が誤解せられず讀者の心に傳はる事。
 - 2、明瞭。讀者が解り易く頭を痛めず理解し得る事。
 - 3、純粹。其の國、其の時代に遍く行はるゝ上品なる語を用ふる事。
 - 4、穩當。最も適切にして穩なる語にて言ひ表はす事。

二、作文の心得。

- 1、文章は、自分の思ふ事を口にて話す代りに文字に現はすものなれば、殊更らしく改むたる事、強ひて難かしき事、或は眞に感じもせざる餘所事などを書くべきものにあらず。
- 2、文章を作るには、談話に要する注意と同じく、相手に吾が趣意の明白に解るやう、人の心持を悪しくせざる様、心掛けざる可らず。
- 3、文章の成立に大切なる二個の要素あり。

第一、現はるゝものが思想にして。

第二、表はすものが言語文字なり。

此の二つのものが相合して、始めて文章となるものなれば、單にあやある言語文字を並べたるのみにては、價值ある文章とはいふべからず。

其處に押すに押されざる立派なる思想ありてこそ、始めて眞に價值ある文章となる事を忘るべからず。

4、文章の六何法。

(イ) 何故に？、文章を書くには、必ず何故に書くかといふ目的あり。

例へば、自己の心覺れにか、他人に見せる爲めにか、單に事物を説明する爲めにか、人を樂ましむる爲めにか、人を教化する爲めにか、各々其の目的の異なるに従ひ、書き振るも自然異らざる可らず。

(ロ) 何事を？、自己の日々の出來事か、學術上の議論か、時事に關する意見か、各々其の事件によりて、相當の手加減をなさざる可らず。

(ハ) 何人に？、素養少き人に對してか、知識階級に對してか親にか、兄弟にか、朋友にか、又は公衆に對しててか、各々其の相手により、相應の差別をなさざる可らず。

(ニ) 何處にて？、教場に於てか、書齋に於てか、旅に於てか、特殊の俱樂部に於てか、一地方に於てか、或は日本に於てか、外國に於てか、これも一概には取り扱はれざる問題なれば、其の心して書かざる可らず。

(ホ) 何時？、大正の御代に書くか、徳川時代にか、奈良朝平安朝にか、といふ事も、一考を要する問題なり。

(ヘ) 如何に？、精密に書くか、簡潔にか、露骨にか、婉曲にか、叙事体にか、問答体にか、擬人体にか、文語体にか、口語体にか、其の最もふさはしき方法を撰擇せざる可らず。

かゝる判り切つたる事柄は、百も承知、言ふに及ばずと思ふ人あらむも、必ずしも然らず、大正の今日に於て、漢文又は平安朝風の擬古文を以て一般公衆に説かむとするが如き人、或は知識の程度低き者に對して了解し難き文を以て臨まんとする人々の、仔細に顧みざる可らざる問題にあらずや。

、出し方、止め方、文章を書くには、先づ中心要點を考へ置きて、徐るに自然に書き始め次に其の中心要點に全力を注ぎ無理なく續け、程よく切りて、最後に、終りをぎつしりと書き收めざる可らず。

6、作文に就いての四多。

(イ) 模範となるべき立派なる文章を多く読み名句は之を誦誦すべき事。
 (ロ) 讀むと共に多く作るべき事。

(ハ) 多讀、多作すると共に、よき所惡しき所、優りたる所以、劣りたる所以等をよく考へ、比較研究すべき事。

(ニ) 多讀、多作し、良惡優劣を考ふると共に、常に目前の自然人事を細かに觀察して、忠實に之を書きあらはすべき事。

斯くして文法上の研究、言葉の使ひ方、擇び方、あやなし方、文句の續け方、切り方、轉じ方、はづませ方、書き始め方、書きをさめ方、段落の分け方等を精確に攻究すべきなり。

リ、文を作るは文を産むなり。

自己の心中にある考を、よく育て上げ磨き整て立派なる自分となし、然る後、自己に相應はしき言葉にて、自己を正直に明白に現はさざるべからず。文章は實に自己の血を分けたる生みの子ならざる可らざればなり。

8、氣障、傲慢を避け、自重謙遜にして親切、所謂嗜みある文章を作らざるべからず。

9、文章の純粹。其の國、其時代に遍く通ずる上品なる語及語法を用ひ、外國語、廢語、濫造語、地方語、術語、俗語等を濫りに用ひざる様注意すべし。

10、文章の穩當。用語が内容の思想事柄に適當し、語句事例の撰擇按排が場合々に應じてよく嵌まる様、よく据る様、よく落ち着く様、心掛くべし。

11、文章修飾の三原則。

(イ) よく調和する事。
 (ロ) あり／＼と目に見ゆる様に寫す事。
 (ハ) 内容の豊富なる事。

文章を立派にする爲めには、右の三要素を具備せしめざる可らず。

12、文語体と口語体との特色。

(イ) 文語体の長所と短所。

長所。簡潔に現はし得る點。

詞遣の形式の畧は定まれる點。

短所。耳遠く解り悪く不自然になり勝ちなる點。

現代の人の活きたる心持を現はし難き點。

(ロ)、口語体の長所と短所。

長所。自然にして書きよく解りよき點。

活々して居る點。

短所。粗雑冗漫になり易き點。

詞遣の形式に一定の極りなき點。

13、右の長短よりして、文語体、口語体の二文章を作るに注意すべき要點。

(イ)、文語体にては、難かき不自然なる分子を去り、吾々の感想を耳近く活かし
て現はすべき事。

(ロ)、口語体にては、無駄を省き、粗雑なる言葉を去りて、品位を傷けざる様、す
べき事。

14、現今並に將來に於ける文体。

本來、時代の先驅者となりて文章推移の潮流を導くものは常に文學上の作物に
して、我が最近の文學中、最も進歩したる小説は勿論、重なる雜誌の論説文、
は最も保守的なる詩歌に於てすら、今や争ひて口語式の新装を著ゆんとしつ、
あり。是より推せば手紙の文はもとより、科學上の文章に至るまで、我國將來
のすべての文章は、畧ぼ口語体に定るべし。

15、文語、口語兩体に對する力の注ぎ方。

前項の理により、文語文に對しては、他人の作を理解し、一通り作り得る程度
に、三分の力を用ふれば宜しかる可く、口語文に對しては、自分の感想を充分現
はし得る様、習練を積む爲め、七分の力を注がざるべからず。

16、文章の分類。

(イ)、記事文。物を有りの儘に寫す文。

(ロ)、叙事文。事物の移り進む道程を寫す文。

- (ハ) 説明文。事理を説明する文。
- (ニ) 議論文。論を論として理づめに推し、讀者を動かして我が意見を納得せしむる文。
- (ホ) 感想文。自分の生活に絡み込みて、意見を現はす文。
- (ヘ) 抒情文。相手を情に訴へて感せしむる趣味本位の文。
- (ト) 韻文。作者が、自己の美的感想を整美せられたる聲調を以て發表したるもの、即ち長詩、短歌、俳句等の如く、これを綴るに韻をふみ、字數にも制限あるものをいふなり。
- (チ) 手紙の文。自己の用件を他人に口にて話す代りに、告げ知らする文。
- 17、記事文に關する注意。
- (イ) 細かく觀察すべき事。廣く細く觀察するは、中心となるべき要點を見出さんが爲めなり。
- (ロ) 要點を浮かし出すべき事。要點を著しく浮かし出すは、文に縮あらしめ、力が爲めなり。

あらしめ、生命あらしめんが爲めなり。

18、叙事文に對する注意。

叙事文は時、場所、主人公、事件の四要素を具備すべきものなれば、力めて主人公の有様をよく寫し出し、事件の推移に最も力を注がざるべからず。

19、説明文に對する注意。

物の條理性質を説き明かすべき文なれば、其の條理の紛れ亂れざる様注意すべし。

20、議論文に對する注意。

(イ) 肝要なる論旨を混り物なく明白に揚げ出し、相手の知力に訴へて理を明にせざるべからず。然れども稍もすれば温味なき議論の押賣となり易を以て、冷かにならざる様、開き直り過ぎざる様、注意すべし。

(ロ) 形式よりは内容を、人工よりは自然を、體制よりは論旨を重んずべきなり。

(ハ) 四段別の組織法。

序論、序出しを書き。

説話、立論の根據となるべき材料を並べ。

論證、其の論の成立する所以を證明し。

結論、要點を撮み、讀者に納得せしむ。

21、感想文に對する注意。

自己の意見と讀者の心との間に、温なる情の關係を成立させざる可らず。然れども、稍もすれば僅なる論旨の正味を得させんが爲めに、不要の内所事を聞かしむるが如き弊に陥り易きを以て、下らぬ私事を並べざる様、我れ面白の繰言を並べざる様、根本の論旨を厭味なく相手に傳ふる様注意すべし。

22、抒情文に對する注意。

我が真情を、包まず、隠さず又飾らず、偽らず素直に言ひ表はし、情、感想の徹底する様注意すべし。
即ち自ら浮び來る關係事物を、書き辿り行く間々に、湧き出づる感情をばつ／＼

と編み込まざるべからず。

32、韻文に對する注意。

韻文は單に讀みて其の内容を味ふのみならず、これを歌ひて聲調の美を玩味鑑賞すべきものなれば、美的情操を練りて内容を豊富にすると共に、耳觸りよく美しき辭句を選び、音調を整へて内容の美と形式の美とを具へしめざる可らず。

和歌五七七七調、俳句五七五調、新体詩七五調、五七調、八五調等様々の調子あり。

24、手紙の文に對する注意。

(イ)、よく解るやう明白に平易に書くべき事。

(ロ)、氣持よく讀ましむるため、相手相應に敬語の使ひ分けをなし、誠意を盡し、所謂嗜みある文章を認むべき事。

(ハ)、普通に用ひらるる、三段の順序。

首部……序出の文句
起筆の發語。

問安の挨拶。

本部……用向を述ぶる用心肝要の部分此の點に最も力を用ひて明白平易に書かざる可らず。

末部……文の締括をつくる止め文句

緊きの挨拶。

結尾語。

(二) 手紙の文は時としては單に自己の用事を他人に通知するのみならず、其の内に独自の味なり香なりを見出さざる可らず。何となれば、手紙は人と人との最も直接なる交渉にして或意味より言へば、骨折り甲斐ある立派なる創作なればなり。小説を書き論文を書くといふも、つまり乘人への偽りなき手紙を書くに外ならざるなり。

25、日記は、出來得る限り毎日附くるを宜しとす。天氣或は寢起の時間等を書くも、悪しきには非ざれども、もつと大切なる事は、毎日自分の心の底に湧き來る實感を、美醜に拘らず 偽らず、飾らず正直に書くべき事なり。斯くて自己の心を反省し、かかる醜く耻しき自分を二度と見出さず、日一日立派なる自分を作り上げる様押し進め行かざる可らず。此の意味に於て、日記は作文の稽古となるのみならず、又精神の修養ともなりて、吾人の必要缺く可らざる日課なりといふべし。

26、文章には必ず個人的色彩あるを要す。何となれば、文章は各個人精神の反映なれば、個人各々個性あるが如く、其の文章にも、亦、個性の躍動なかるべからず。

27、題材は、直接に經驗せる事項、又は諸教科に於て學習せる事項、及び生活上必須の事項等、自己の最も興味を有し、必要を感じたるものにて、發表せんとする動機の盛なるものを採り、文字語句は平易適切を主眼とし、思想を統一整頓して、順序よく且つ自由に發表すべし。

28、感興は實に文章を作爲する原動力にして、又た佳文を得る源泉なれば、感興起りたる毎に、其の機會を逸せず力めて作り試むべし。

- 29、隨意選題の場合は、他を顧慮せず、自己の全能力を發揮して、獨創的に大膽に自由に、手の縮まらざる様に發表すべし。
- 30、一定の文題提出せられたる場合は、自由作文の弊たる奔放無節度に流るゝ事なく、よく題意に適ふやう注意すべし。
- 31、文題定れば、腹案をなし、文題に關する舊觀念を喚起して大体の範圍を定限し、先づ主想となるべき着眼點を定め、次に記述事項を選び、更に之れが排列の順序を工夫して、思想を整序すべし。
- 32、腹案既に成れば、毫も躊躇逡巡する事なく、文字に囚はれず明瞭に記述すべし。
- 33、記述終れば、更に、脱字、誤字、事實の誤謬、修辭の無雜、不當の用語等を訂正し、冗句、贅語、重複語の削除をなし然る後假名遣、語法文法の誤謬を正し、方言訛語を改め適宜に句讀を切り語句の修飾、語呂段落の適否等の吟味をなし、所謂推敲して明瞭、有勢、優美を期せざるべからず。
- 34、作文に於ては、獨創の精神最も重要にして、模倣作文には生命なく殆ど價値なきものなれば、常に大に努力して自ら發明する所なかるべからず。實に作文は周到なる觀察力を練り、獨創的精神を涵養し、個性を發揮すべき好個の學科なり。

35、文章全体に通ずる注意。

- 第一、我心の眞實を言表する事。
- 第二、意味の精確明瞭に解る事。
- 第三、讀者に快感を與ふる事。
- 第四、世の爲め、人の爲めになる事。

これを要するに、作文者の第一に心掛くべき事は、己の考を明に相手に傳へ、己の心持或は感じ味ひを、其の儘に現はして、己の感じたと同様に相手に感せしむる事なり。難かしき言葉を使ひ、知識を誇り、巧なる言ひ廻はしをして人を驚かし、つまらぬ感想を深げに床しげに有難げに繕はんなど思ふは誠に甚だしき心得違なり。斯く言はへ新らしき文章には、少しも技巧を要せざるが如く思ふ人あらむも決して然らず、難かしき由來付たる殊更らしき言葉を用ひず、

平易にして、すらくど目觸り耳觸れよき語を用ゐんとする所に、却つて大なる勞力を要するものなり。これを無技巧の技巧と言ふ。されば文章は、讀者をして苦勞なく、己の眞の心持、眞の生活に觸れしめ、己の文章を餘所事ならず思はしむる様、努むべきなり。

第五 文法學習の目的

言語文章を用ふるには、必ず一定の法則あり、これを文法といふ。吾人は、生れ落ちてより死に至るまで、絶えず他人の言語を聞き、文章を見ると共に、常にこれを用ひつつあるが故に、必ずしも文法に依らずとも、一通り言語文章を用ひ得ざるには非ざれども正しく己れの意志を表はし思想を述べ、他人の文章を解せんと欲せば、必ず文法に依らざるべからず。これ、吾人の一通り文法を學ばざるべからざる所以なり。

第六 文法學習上の注意

一、文法を會得するには、多くの用例に接して演習せざる可らず。何となれば、百聞

は一見に如かず、解説の如何に詳細を極むとも、用例に依りて悟入するに如かずればなり。

二、實用に縁遠き抽象的の議論は之を避け、出來得る限り簡易平明なる法則を記憶し、且つこれを日常の實施と照し合はせて、講讀、作文、談話、演說等に應用すべし。

三、然れども、餘りに文法にのみ拘泥すれば終に中毒して、作文にもあれ文の解釋にもあれ、形式に傾き過ぎ、大切なる内容はお留守となり、折角の名文もこれを殺し、文法本來の目的に反するが故に、然る事なきやう注意すべし。

四、動詞、形容詞、助動詞の活用は、記憶し難きにあらずと雖も、亦屢々忘失する事あるが故に、必要の場合、直ちに檢し得るやう、一目瞭然たる表を備へ置かざる可らず。

五、國語假名遣及び其の音便は、常に誤らざるやう、正確に記憶し置くべきなれども、これとて時としては忘失する事なきを保せざるが故に、必ず表を備へ置かざる可らず。

六、係結法は、普通文には少なく、口語文には全く存せざるが故に、現代の作文上には殆ど必要を認めざれども、歌謠古文に専ら使用せられあるを以て、其の解釋上、これをも了得し置かざるべからず。

七、動詞と助動詞ヲニヲハとの連続、若しくは助動詞と助動詞テニヲハとの連続はその規定煩雜にして、一々之を諳記する事頗る困難なるのみならず、かかる不要の事に多くの腦力を費すは、利ならざるを以て、一々之を諳記せずとも、時に臨みて直ちに檢し得べきやう、表を備へ置くべし。

八、文章の法格は、文法中最も重要なものなり。蓋し文章の法格を知らざれば、文章を作るに當り、頭ありて足なき幽靈文章となり、或は頭と足とはあれども胴なきお化の文章となるなど、折角骨折りて文章を作るとも、正確に己れを思想を表はし其の目的を十分に達し得ざる事あり。

また、他人の文章を読むに當りても、其の構造の複雑なるものに至りては、何れが頭、何れが胴、何れが足なるかを辨じ得ずして、文の眞意を取り違へ、非常なる

誤を生ずる事あり。されば、文章の法格は、これを文章の解剖に應用すると共に、文章の組立にも應用し得るやう、十分會得せざる可らず。

九、自動詞と他動詞との區別、及容語と補語との區別は、これを文法學的に言へば措く能はざる問題ならむも、初學者の實用方面より言へば指したる重要な問題ならざるのみならず、却つて煩雜して頭を混乱せしむる虞あるを以て、なさざるを便とす。

一〇、文法上の規約は、絶對的のものにあらず、時代に應じて自ら變遷するのみならず、尙ほ進んで伶俐なる改良を施さざる可らず。言語文章の變遷は、世の進歩につれて自ら變りたるものなれば、決して言語の腐敗墮落を意味するものにあらずして、寧ろ進歩發達を意味するものなり。されば便利上許容せられたる言語文法語法等は、これを捨てずして利用するを以て伶俐なりとす。

習字科

42

第一 學習の目的

日常必須なる文字を明確、整正、敏速及美麗に書き得るの技能を了得し、兼ねて綿密、清潔、秩序等の良習慣を養ふにあり。

第二 學習上の注意

- 一、習字の際は先づ手本の讀方と意義とを能く會得し然る後ち文字の間架、結構、運筆、筆法等に注意して練習すべし。
- 二、初めより速書すべからず最初は一點一畫も忽にせず十分に念を入れて習ひ漸次熟達するに従ひ運腕自在に練習すべし。
- 三、一字を書く間には決して墨接ぎをなさず必ず一筆にて書き了るべし又能く染筆と墨色の濃淡とに注意すべし。
- 四、難字を書くときは先づ指頭にて試書するか又は意中にて暗書をなして其結構、筆

意を充分納得したる後に筆を執るべし。

- 五、技能科學習の生命は實に練習にあり然かも其練習は只同じ事を反復するのみならず、一步は一步と改良に改良を加へ反省に反省を重ねて練習するにあり、故に文字を書き了りたるときは必ず能く手本と比較對照して自ら其缺點を矯正し然る後幾度も練習すべし。
- 六、一旦習ひたる字体は能く記憶把持し臨書の後は手本を放れて諸書の練習をなすべし行書、草書に於ては最も然りとす。
- 七、書は手を以て書かす心を以て書くものなりとは古人の至言にして心正しければ字も亦正し故に習字の際は心身を端正にして練習すること最も肝要なり。
- 八、細書は横劃を細く縦劃を太く斜劃を其中間に書くものなれども個々の文字の能否よりは全體の字形、字行及び整正を主眼として書くべし。
- 九、執筆法は單鈎、雙鈎何れの法に據るも妨げなければども普通小字は單鈎に中字、大字は雙鈎に據るべし。

43

一〇、腕法は、枕腕、提腕、及び懸腕の何れを用ふるも宜しけれども小字は枕腕に中字は提腕に大字は懸腕にて書くべし。



英語科

第一 學習の目的

高等女學校に於ける英語學習の目的は普通の英語を読み、書き、聽き、語り得る能力を養ひ、歐米の知識を收得し、外國人の生活及其社會狀態を理會し、兼て徳性の涵養に資するにあり。

第二 學習上の注意

○一般の心得

- 一、語學の研究は一時に多く學ばんとするよりも所定の學習を確實にし反復練習して漸進的に刻苦精勵の功を積まざるべからず。
- 二、教室内にありては英語活用の氣分を養ひ、質疑応答を活潑にすべし。
- 三、「ハート」の準備と其整理とを周到にすべし。
- 四、誦讀は英語の運用を自在ならしむ基礎となるものにして極めて有益なれば下級に

ある間は勿論上級に進みても力めて之を試むべし。

五、第一、二學年にありては豫習するに及ばず復習に全力を注ぐべし、三、四學年にありては復習と共に必ず豫習を行ふべし。

○各分科學習心得

一、發音及讀方。

- 1、發音は語學の基礎にして、若し其始めに於て不正なる發音に慣るれば後來之を正すこと頗る難し、充分注意して習得すべし。
- 2、單語に假名をつけて發音を記憶するが如きは大なる弊害あり嚴禁すべし。
- 3、各音固有の性質を理解し、舌の位置、口の開閉等苟もせず、常に教師の口構ひに注目し模倣によりて正しき發音を習得すべし。
- 4、單語の強音節に注意すべし、又同一の語にても用法によりてアクセントの位置異なるものあることを記憶すべし。
- 5、讀方に於ては語勢、抑揚等に注意し、且意味を了解して文の内容を最もよく表はす様留意すべし。

す様留意すべし。

- 6、事情の許すかぎり音讀をなし、口の開閉を自在ならしめ、耳目を均等に働かしむべし。

二、解釋。

一、豫習の際は辭書より未知の單語につき、發音、アクセント、及意義を調べ、再三全章を通讀して其大意を知るに力むべし。

- 2、教室内に於ては自ら進んで解釋を試みると同時に疑問を質し些の疑點をも残すべからず。
- 3、復習の際は直讀直解し得程度まで反復練習し、主要なる語句は暗記すべし。
- 4、單語は成るべく成句として記憶し、運用に便ならしむべし。
- 5、彼我語法の相違を會得すべし。
- 6、外國の思想、風俗、習慣等の大要を了解して英語學習の助となすべし。

三、綴字

- 1、綴字は發音と關連して習得し、且其一般法則を悟るべし。
- 2、綴字を練習する際は音節の切方に注意すべし。
- 3、綴字は口又は手によりて復習、書取等を利用し上級に至るまで練習すべし。

四、會話

- 1、會話を學ぶには對者の語ることを聽きて了解する方面と自己の思想を對者に發表する方面とを練習せざるべからず。
- 2、聴取及誦讀は廣義の會話とも見るべきものにして、此二者に習熟すれば會話の能力を著しく進歩せしむるを得べし。
- 3、教室内は勿論其以外にても機會あらば臆することなく英語を使用すべし。

五、書取

- 1、聴取によりてまづ其意味を了解することを力むべし。
- 2、句讀點及其他の符號に注意すべし。
- 3、成るべく運筆を迅速にし、且文字を明瞭に書くべし。

- 4、課外に友人相互書取の練習を行ふべし。

六、作文

- 1、英語にて所謂作文なるものは其初步に於ては簡單なる語句を口頭にて述ぶる代りに正しき綴方と句讀法にて紙上に書き表はしたるものと知るべし。
- 2、邦語を英語に譯すときは其語を譯さずして其意味を英語にては如何に述ぶべきかと工夫すべし。
- 3、聴取によりて學べるところを或は記憶により或は自己の英語にて之を書き表はす練習をなすべし。
- 4、既習の英語を使用して自己の思想を書き表はすことに力め、上級にありては簡單なる日記、通信文等を試むべし。

七、文法

- 1、文章の組立及語の變化に關する重要規則を會得し、之を解釋、會話、作文に適用し自信を確むべし。

2、上級に進みては除外例の場合をも研究すべし。

八。習字

- 1、初學者の者は教師の指定したるペン及インキを使用すべし。
- 2、姿勢を正しくし、習字帳の配置及ペンの持方に注意すべし。
- 3、習字の時のみならず、總て英字を書くときは手本の字体により正しく明瞭に書くべし。



歴史科

第一 日本歴史學習の目的

國史上に顯したる重要な事蹟を知り、國家、社會の變遷並に文化の由來を理解し、悠久の過去より現在に互りて國運發展の跡を究め、其の徑路を明にすると共に、國體の世界無比なる所以を悟り、祖先の國家に貢獻せし努力に鑑み國民的志操を養ふに在り。

第二 東洋史と西洋史との意義

歴史事實は繼續的に起るものにして、之を場所の東西によりて區分し西洋史又は東洋史となすべき理由なし。然るに從來此の區分法を用ひしは、全く研究上の便宜に外ならず。

今世界人類の發展の跡を考ふるに、一方には、ニール河及びチグリス、エウフラト河畔を中心とし、漸次西方に擴がりたる西方の文明と、他方には黃河、楊子江を中心として起りたる東方の文明とあり。東洋史並に西洋史とは、東西文明の由來即諸民族の

創作したる國家及び文化の進歩發達を論究記録せるものを云ふなり。

第三 東洋史・西洋史學習の目的

日本歴史によりて國民の國家に對する觀念を明確にしたる上は、更に東洋史を學び往時東洋に於て文明の中心と仰がれ文華を誇りし支那、及び印度の凋落して現時の慘狀を呈するに至りし原因、結果を明にすると共に獨り我國運の隆盛なる所以を究め、以て亞細亞諸國の柱石たる日本の位置を明瞭にすべきなり。

既に東洋に於ける日本の位置を知りたる上は、更に進みて西洋史を學び世界に於ける日本の位置を明かに了知し、文學、美術、工藝その他百般の事業に對して彼の長を採り、我の短を補ひ世界的文化の進運に伴ひ得べき完全なる國民となり、高尚なる人類となるべきなり。

第四 歴史學習上の注意

一、我が建國の體制と、國家、社會の發展の經路とを明にすべし。

國體の尊嚴と、祖先活動の成跡とを知らざるれば、忠良なる發展的國民たるの自覺を得難ければなり。

二、我が文化の發達の由來を明にすべし。

我が文化の由來を究め以て、日本固有の文化が昔時支那及び印度の文化を如何に全化せしかを知らざれば、現今、或は將來に於て、西洋文化を如何に消化すべきかを了解し難ければなり。

三、世界の趨勢に通じ日本現時の位置を明にすべし。

外國歴史を修め、世界各國の興亡、變遷、文化の由來等につき原因、結果を明にし、我國と比較して研究せざれば、宇内の大勢を知り眞に日本の現狀を理解すること能はざればなり。

四、地理と年代との觀念を明にすべし。

地理と年代とは、歴史の雙眼なり。若し此の二要素を等閑に附すれば、歴史は才伽嘶と化し、其の價值大に減するを以てなり。

五、社會の世態、人物の家系及び人格を明にすべし。

以上三者は何れも人物、事件の真相を穿つに必要な条件なればなり。

六、史眼の養成を圖るべし。

史眼とは、史實に對する觀察、批評、判定等の眼識にして歴史研究上大切のものなればなり。

七、地圖、系譜、年表等は常に之を使用すべし。

以上の使用を怠る時は、明確なる史的觀念を得ること能はざればなり。

八、遺跡、遺物、繪畫等を觀察すべし。

これ實狀を想像、理會し適確なる知識を得るに便なればなり。

九、新聞、雜誌を閲覽すべし。

日本の對外關係を知り、世界的に活動するには新聞、雜誌により活きたる知識を得ること必要なればなり。

第五 學習の方法

學問を修めんには、先づ其の方法を誤らざるを要す。

豫習、受業、整理の三つは學習の主なる方法なり。學習の第一歩は豫習より始まる、豫習は將に學ばんとする所を自ら學び、自ら修めて理解せんことを努め、其の學ぶ所を受け入るる準備なり。山海の珍味も、食ふ意志無きものには強ふること能はず、學習の志無く、其の第一歩たる豫習を怠る者は良教師と雖も如何ともしがたし心すべきことなり。

次は受業なり、受業の際は教師の説明は勿論、學友の發表、應答、質問に至るまで熱心に注意し己の知らざる所を明確にし、若し疑問の點あらば臆すること無く質問すべし。殊に注意すべきは教師の指導、説明の眼目、要點を把握することなり。受業の次は整理なり、整理は理解を正しくし、記憶を確にするものなり。如何に熱心に習ひ學ぶとも整理を怠るときは、恰も底無き瓶に水を汲み入るるに等しく折角の努力も久しくして効無し。されば怠らず整理すべし、整理の効は之を屢すれば益大なるものなり。

一、豫習。

- 1、教科書を通讀し、史實の概要を記憶し置くべし。
- 2、重要な年代は、今より約何年前なりしかを調べ置くべし。
- 3、場所は歴史附圖と對照して調べ置くべし。
- 4、挿繪並に其の解説を調べ置くべし。
- 5、地名、人名等の讀み方を調べ置くべし。
- 6、標本、模型、繪畫等につきて觀察し置くべし。

二、受業。

○教室に於て。

- 1、他生の發表、質問は注意して聴取すべし。
- 2、自己の發表につきての教師の批評を傾聽すべし。
- 3、教師の敷衍、指導は細心の注意を以て傾聽すべし。

○講堂に於て。

- 1、陸海軍記念日に於ける、戦争及び戰術の講話は國民にとりて大切なるものなれば熱心に聴取すべし。
- 2、朝會の際に置ける歴史上の講話は、重要な者なれば特に注意して聴取すべし。
- 3、學者、名士の歴史上の講話は有益なれば傾聽すべし。

○旅行及び遠足先に置て。

古戰場、古社寺、城壘、遺跡、遺木等を觀察し説明を聴くべし。

三、整理。

- 1、教科書を通讀をなすべし。
- 2、ノートの整理を行ふべし。
- 3、全課史實の概要を把握すべし。
- 4、概括表を作成すべし。
- 5、歴史地圖を作成すべし。
- 6 系圖、年表を作成すべし。

地理科

58

第一 地理學習の目的

人類は一方に物質的生活を營み他方に精神的生活を營むものなれば、此の兩生活の範圍は極めて多方面にして甚だ複雑なり。

地理は此の多方面に複雑なる生活現象と、地表、氣象、海洋、生物、無生物等の自然現象との關係を考究し、我等人類の如何に自然を利用し、如何に自然に制限せられ其の影響を受けつゝあるか、以上の生活現象と自然現象との相關係して現れる種々の現象に關する知識を收得し、是に由りて我國及び諸外國の國勢を理解し、社會の有機的生活を了解し、日本國民として社會的生活を圓滿に遂げんとするに在り。

第二 地理學習上の注意

一、地理の學習は推究的なるべし。

從來の地理學習者は、動もすれば地理的事項を孤立的に記憶し器械的に誦讀せる弊あり。

斯くては徒に勞多くして効甚だ少し、宜しく因果の關係を推理して活きたる地理的知識を得ざるべからず。例へば、地形、氣候と産業との關係、都市發達の理由、流水の作用、火山、温泉の原因等につき、其の因果關係を推究し聯絡ある知識を收得するが如し。

二、讀圖力を養成すべし。

地圖は視るべき者に、あらずして讀むべき者なり、然も巧に讀まざれば價值少し。地圖を開きて山脈の方向、土地の高低を知らば、河流の方向を悟るべく氣候、産業等の情況をも推知するを得べし。尙ほ進みて地名、植民地等の分布を知らば東方の西漸西力の東漸の迹を察地すべきなり。

地圖は單に地勢を表はせるのみならず、實に政治、軍事、經濟等の生きたる記錄

なり。されば地理學習者は先づ之を讀破するの力を養成せざるべからず。

三、比較研究を重んずべし。

比較に依らざれば、知識は明確とならず、然れども單に數字のみの比較にては不
充分たるを免れず、宜しく多方面に亘りて比較すべきなり。

日本地理の學習は成るべく郷土たる本縣(或は本郡或は本町村)と比較し、外國地理
に在りては、日本と比較して研究すべきなり。

四、統計に關することは、左の諸點に注意して學習すべし。

- 1、必要なるものに限り概數を記憶すべし。
- 2、貿易額、貯金高等は、人口數を以て割一人幾何と云ふ様に調べ上ぐべし。
- 3、鐵道線の長さの如きは、面積を示す數にて割り一方里(或は一方哩)につき何哩と
云ふ風に調査すべし。
- 4、重要なものは數年間(或はそれ以上)の統計表を調査し、以て進歩或は退歩の
迹を考究すべし。

五、新聞の閲覽を怠らざる様注意すべし。

- 1、新都邑の出現につき。
從來孤立的境遇に在りし地方の交通機關發達の結果、次第に我等の生活と親密
なる關係を生ずるに至りし爲か、或は從來有名ならざりし産物の勃興せる爲か、
或は軍事上の使用地となる爲か、或は其の他の原因なるかを調ふべし。
- 2、論說につき。
新聞紙の生命とも云ふべきものにして、政治、經濟、外交等につき全力を注ぎて
批判を試むるものなれば、價值甚だ大なれども政黨、政派の關係もあれば、心
して讀むべし。
- 3、海外電報につき。
最新の世界の出來事を知り、敢て時勢に後れざらんことを期すべし。

第三 學習の方法

一、豫習。

- 1、教科書の読み方、意義を調べべし。
- 2、地圖により教科書と對照して左の各項を調べべし。
(1)方位、(2)位置及び境界、(3)地形、産業、(4)交通、(5)都邑等、
- 3、縮尺の長さにより河流、鐵道の長さ或は面積の大要を調査すべし。
- 4、既知事項と比較して調べべし。
- 5、繪圖、實物、標本、模型、寫真等の觀察をなすべし。
- 6、關係圖書、雜誌の閲覽をなすべし。

二、受業。

主要點を逸せざる様注意して學ぶべし。

○主として教室に於て。

- 1、自他の發表に對する批評、指導に注意して活知識を收むべし。
 - 2、教師の敷衍せる點に注意し教材の輕重を甄別すべし。
- 講室に於て。

- 1、朝會の際に於ける時事問題の講話を傾聽すべし。
- 2、名士、學者或は實地旅行家の地理に關する講演に注意すべし。

○旅行或は遠足先に於て。

- 1、火山、溫泉等の視察をなすべし。
- 2、各工場の視察をなすべし。
- 3、名所、舊蹟の視察をなすべし。

○興行物の觀覽。

- 1、地理に關する活動寫眞は注意して觀るべし。
- 2、巡回動物園、等は注意して觀るべし。

三、整理。

- 1、一地方若くは一國を終りたる時には必ず、其の大要を概括して要領を會得すべし。
- 2、一縣、一地方、一國を終りたる時は略圖を描くべし。

- 3、人文及び地文上の動態は怠らず訂正すべし。
- 4、簡單なる模型を作製すべし。
- 5、當番を定めて、月(年)末に於て平均溫度を算出す可し。



數 學 科

第一 學習の目的

數學を學ぶ目的は數量の關係を明にし、計算に習熟し、生活上必須なる知識を得、思考を精確ならしむるにあり。

第二 學習上一般の注意

數學科は國語科と共に所謂基本的の學科と稱す可きものなれば、特に意を用ひて學習せんことを要す。

數學に於て學習したる知識、並に修練したる思考力は、總ての學科學習上の基礎的素力たるのみならず、復雜なる社會に處する上に於ての重要な力なり。

第三 算術學習上の注意

- 一、獨立して思考するにあらざれば推理力を練磨すること能はず、故に問題を解くに當りては、左の諸項に注意せざる可らず。

- 1、問題を熟讀して、題意を明かに理會する事は、思考に入る第一歩なり。
- 2、圖解により、或は紐紙片等の實物に就て、思考を進むることは、解法の發見を容易ならしむる点に於て有力なる方法なり。
- 3、事實問題は之を類別して其如何なる種類に屬するかを、識別するを要す。
- 4、問題には思考に重きを置けるものと、計算に重きを置けるものとの二種あり、其の目的が、何れに存するかを辨別す可し。
- 5、一度行ひたる解法は、更に自問自答して正否を確むるのみならず、更により以上の、簡便なる良法の有無を研究せざる可らず。
- 6、式は大體に於て分解式によるを便とすれども、適宜總合式を用ひて、論理的に配列す可し。

二、計算は正確と迅速とを生命とすることを忘る可からず。

- 1、暗算は計算を敏速にし、且つ思考力の練磨に多大の効果あるものなれば、計算の際出來得る限り之を用ふるを要す。

- 2、筆算による計算は、正確にして而も迅速なる可く、總合式の計算にありては、其順序を誤らざる様注意す可し。

數字の書き方粗雑にして整列せざるときは、計算の誤りを來すこと多きを以て常に丁寧に正確に、而も整然と書く習慣を養ふ可きなり。

數字のみならず、等號橫線等も正しく書かんことを心懸く可し。

三、概算及檢算は、答の正否を知る上に必要なる條件なり。

- 1、計算は之に着手する前に必ず其概略を豫算し置くを要す、而して概算を行ふことは問題の解答に暗示を得るのみならず、社會上の種々の問題に就て、其概略を解決するの基礎力を養ふことを得るものなり。

- 2、檢算は答の正否を知る唯一の方法にして、問題の解答を終らば必ず行ふべき重要事項なるのみならず、檢算其のものが更に新問題として、思考を練習する、有力なる材料たる場合少からざれば、之が爲めには相當の時間を割くことを惜むべからず。

四、學習事項は徹底的に理解せざれば何等の効果なし、故に完全に理會する迄反覆考究して、自己の知識たらしめざるべからず、徹底的理解を助くるに必要な事項を舉ぐれば次の如し。

1、論理的説明に熟練すべし。

徹底的に理解せざれば、論理的に説明すること能はず。而して問題を解するに當りては、分解式の各段毎に必ず簡明なる説明を記述すべく、口述によりて説明する場合は、不用なる語を省き、且教師の補助を受けず獨立して述ぶることを勉むべし、獨立して發表することは、理解を徹底せしむる上に於て、甚だ有効なる方法なればなり。

2、宿題は困難なりとて直に斷念するが如きことなく、飽くまで推究に推究を重ねて、解し得たる時の愉快を味はざるべからず。

3、度量衡に關する事項は、成る可く實際に當りて經驗するを要す、即ち校舍敷地等の面積、日常使用する器具の、容積、體積、重量等の如きは、自ら度量衡器を使

用して計ること肝要なり。

4、自ら問題を構成するとは、理解力を進むる上に多大の効果あることを忘るべからず。

5、問題は教科書にあるもののみを以て満足せず、参考書より、或は實際界より、種々の問題を求めて之を練習すべし。

五、生活上必要な事項に注意して常識を養ふべし。

1、諸物價の時價に注意すべし。

2、新聞の經濟欄に注意して物價の高低、公債、株券の利子、配當金の割合等を知るべし。

六、珠算に就て。

珠算は運算の形跡直に消滅するの缺點あれども、實際社會に於ては其の敏速輕便の點に於て、大に重寶とする所のものなれば、其の熟達を圖らざるべからず。

珠算學習の初期にありては筆算暗算と對照して其原理を攻究し、熟練するに從ひて次第に無意識にして手指を動かし得るに至るべし。

第四 代數學習上の注意

70

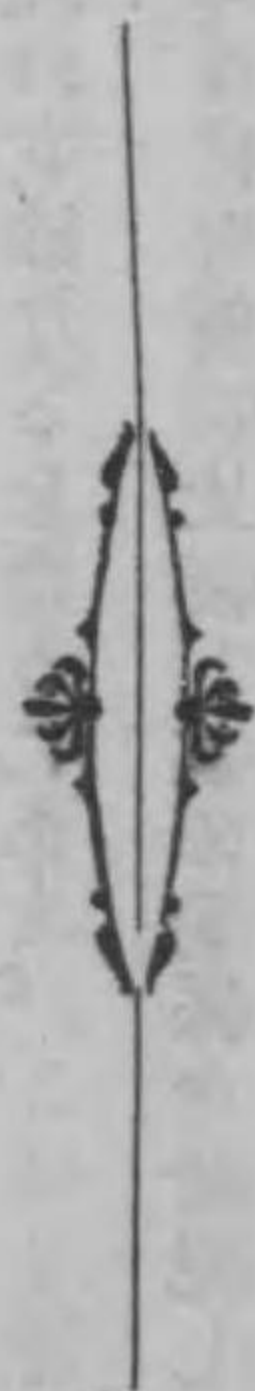
- 一、代數にありては、算術と相關聯して之を補足し一般化して算術、に於ける問題の理解を一層明確ならしめし。
- 二、代數的運算のみに没頭せず、廣く實際問題に適用せんことを力むべし。
- 三、定義公式等は當に正確に記憶して、其の應用を自在ならしむべし。
- 四、代數に於ける計算は、暗算によるを本則とすべし。

第五 幾何學習上の注意

- 一、幾何に於ける圖は一般的に描くべし。例へば三角形と云ふに、正三角形、直角三角形等を描くが如きは、推理の混乱を來す基なれば大に注意すべし。
- 二、圖は精密に描くべし。精密なる圖は往々證明のヒントを與ふるものなり。
- 三、題意を明かに理解し、假設と終結とを混同せざる様にすべし。
- 四、證明は口述記載何れの場合にも、冗語を省きて論理的ならんことを力むべし。

五、公理、定義定理等の文句は、最も簡明にして要を盡せるものなれば、其の儘記憶すべく、其方法としては、表或はカードに依るを便とす。

六、幾何學の學習に先ちて、簡單なる幾何書法を學ぶことは、其入門を容易ならしめ理解を助くる点に於て効果少からざるものなり。



理化科

第一 學習の目的

理化學學習の目的を分つて次の二つとす。

一、實質的方面。

- 1、自然界に起りつつある、生伏起滅の現象を正當に理解して、各種の自然力の偉大、宇宙の真理の玄妙なるを悟るにあり。
- 2、自然の現象を種々に分解し比較し其の關係を發見して、自然界共通の法則に到達し、以て種々の迷信を打破し、日常生活を合理的ならしむるにあり。
- 3、人間の生活に愉快と幸福とを與ふる重要な器械及化學工藝に就て、大體の智識を修得して、科學の進歩と現代文化の程度とを理解するにあり。
- 4、法則眞理より或は觀察經驗より、更に新眞理を發見して現代文化に貢獻せんとするにあり。

二、形式的方面。

觀察力を進めあらゆる感官を鋭敏ならしめ、事物の比較辨別に熟し、想像力を旺盛ならしめ、推理斷定の力を練磨發達せしむるにあり。

第二 學習上の注意

一、自然現象の觀察。

自然界に於て日々目撃する種々の現象は、常に周到の注意を拂ひて、觀察し、之に對して疑問を起し、あらゆる方法によりて、これを解決せんことを努むべし。

二、豫習及復習。

- 1、新に學ぶべき所は、前以て必ず一通り研究し、疑問の点不可解の点を發見しおきて、受業の際に特別の注意を拂つて之が理解に力むべし。
- 2、不審の点は理解するまで遠慮なく質問すべし。
- 3、學習したる事項は更に思考を重ねて、之が理解收得を充分ならしむるのみならず、要点は之を記憶すべし。

- 4、定律法則等は、輕便なるノートに抜き書きして常に記憶に止めおくべし。
- 5、主なる原素化合物等の製法性質効用等は、表を作りて記憶し、新に學習する毎に之に記入し得る様にすべし。
- 6、分子原子の假定説に従ひ、酸とアルカリと鹽とに關する一般の事實、金屬が酸に作用して水素を發生するが如き重要な化學變化を、化學方程式により明瞭に簡單に理解し、之を押し擴めて一般の化學的變化の經路を、明かに想像の上に描くを得るに至るべし。而して質量不變、定比例、倍數比例等の重要な定律は、常に方程式と相關聯して腦裡に止めざるべからず。
- 7、器械及物理的現象、化學的裝置等の略圖を巧に書き得る様、描圖力を養ふべし。

三、實驗。

1、實驗の種類。

A、證明的實驗。原理の眞なることを證明する爲に行ふもの(演釋的)。

B、觀察的實驗。現象の經過を觀察したる結果或る原理に到達する爲に行ふもの(歸納的)。

2、實驗の場所。

實驗は實驗室に於て行ふを以て満足せず、家庭に於ても、料理、洗濯、染色、衣服の整理、室内の整頓、換氣、採暖、等あらゆる家事を營ひに當りて之を實驗し、或は特に日曜等の時間を割きて、種々の興味あり且有益なる實驗を試むべく、屋外に於ては汽車、汽船、電車、電信、或は氣象の觀察、工場の見學等、機會ある毎に行ふべし。

3、玩具の利用。

玩具は安價にして趣味あるもの多ければ、之を利用して各其の理化的説明を試みなば、極めて面白くして且有益なるべく、更に新しき發明をもなすことを得べし。

4、簡易器械の製作。

能動的に自ら工夫発見せんことを努め、簡單なる器械模型等の創作を試むべし。
5、實驗につきての注意。

- (イ) 實驗の目的を明にすべし。實驗の進行及び其の結果を精密に觀察推理し、決して無意味に見す過すが如きことあるべからず。
- (ロ) 獨立的に實驗し進んで思考を重ねべし。
- (ハ) 實驗の進行及び其の結果を精密に觀察推理し、決して無意味に見す過すが如きことあるべからず。
- (ニ) 實驗の準備は手落なく整へおくべし。裝置、器械器具、試薬、實驗ノート等にして、實驗ノートには別に定むる形式により、目的、準備、方法、結果、等を記入すべし。
- (ホ) 實驗の順序方法を會得して後着手すべし。
- (ヘ) 實驗終らば、其方法、結果及注意すべき事をノートに記入すべし。
- (ト) 實驗に失敗せる場合の準備をなしおくべし。フラスコ、試験管、ビーカー、其他破損する憂あるものは、二個以上準備し置くこと必要なり。

(チ) 薬品の取扱を丁寧にするべし。

劇薬は特に其の取扱に注意すべく、酸、アルカリ等は他物に附着せしめざる様、發火点低きものは火に近づけぬ様、總て使用したる後は直に栓を施しおくことを忘るべからず。

(リ) 亞硫酸瓦斯、鹽素等、有毒なる瓦斯を製する場合は、衛生上の注意を怠るべからず。

(ヌ) 實驗の後は丁寧に、且清潔に、後始末をして、器械器具試薬等は所定の場所に納めおくべし。

四、課外讀物。

課外に餘裕あらば、圖書室に入りて或は自宅に於て、理化に関する書籍を閲覽研究すべし。

五、生徒實驗。

生徒は四人或は六人を一組として實驗を行ふべく、器械の設備あるものは個人的

に行ふこともあるべし。

危険の起り易き實驗。(例へば水素の製法の如き)装置の困難なる實驗は、熟練せざる間は教師の實驗を観察する次に止むべし。

生徒實驗要項 化學之部

實驗事項	用具	藥品其他
一、水ノ蒸溜	スタンド、フラスコ、試験管、ビーカー、砂皿、三脚臺、酒精燈、硝子管、三角鉢、ゴム管、コルク	水
二、酸素製法性質	全前 外ニ廣口瓶、圓蓋、水槽、燃燒匙	鹽素酸カリウム 二酸化マンガン マツチ、燐、石灰水、蠟燭
三、炭酸瓦斯製法性質	二口瓶、安全漏斗、硝子管、コルク、瓦斯捕集瓶、燒燃匙	大理石 稀鹽酸 石灰水、蠟燭、マツチ
四、亞硫酸瓦斯製法漂白作用	破璃鐘(共栓付)蒸發皿、コップ、ピンセット	色アル花、絹布片、麥桿 硫黃、マツチ
五、硫酸ノ性質	試験管、硝子棒	硫酸、銅、木片、布片 リトマス試験紙

六、硫化水素ノ金屬ニ對スル作用	試験管、キツブノ装置(共用)	硫化鐵、強硫酸、金屬片 鉛白
七、鹽化水素及鹽酸ノ製法	フラスコ、リングスタンド、酒精燈、コルク、ゴム管、硝子管、砂皿、三脚臺、集氣筒、リトマス紙、硝子圓蓋、マツチ	食鹽、濃硫酸、水、リトマス液
八、漂白粉	水槽	漂白粉稀鹽酸布片
九、硝酸ノ性質	試験管 アルコールランプ マツチ	銅、硝酸
一〇、アムモニウム製法アムモニウム水及鹽化アムモニウム	硬試験管、硝子管、アルコールランプ、コルク、廣口瓶、圓蓋、硝子棒、マツチ	鹽化アムモニウム、生石灰、鹽酸
一一、灰汁ヨリ炭素ヲ採取スル法	蒸發皿、酒精燈、砂皿、三脚臺、マツチ	灰、水、リトマス液、汚レタル半衿
一二、炭酸ソーダ	試験管	炭酸ソーダリトマス液
一三、重曹ヨリ炭酸瓦斯ヲ發生セシムル法	試験管、コルク、硝子管、集氣筒	重碳酸ソーダ、稀硫酸(十倍)
一四、石灰水ノ製法	ビーカー、試験管、硝子棒	生石灰、水

一五、中和	試驗管硝子、棒	苛性ソーダ、稀鹽酸、リトマス紙
一六、石炭瓦斯	硬試驗管、コルク、ランプ、ビーカー 硝子管、金網	石炭
一七、金屬ノ性質	金槌、針金、萬力	銅線、鐵線、等
一八、鹽化銀作る法	試驗管、	硝酸銀、稀酸鹽
一九、醋酸鉛	試驗管、全挾	醋酸鉛、稀硫酸
二〇、膽礬ノ結晶	試驗管、蒸發皿、砂皿、三脚臺、アルコールランプ	銅、濃硫酸
二一、鉛白ト硫化水素	試驗管、	鉛白、硫化水素
二二、含水炭素	試驗管、全挾	蔗糖、硫酸、
二三、澱粉ト沃素	試驗管	澱粉、沃素、アルコール
二四、纖維識別法	試驗管、アルコールランプ	絹、木綿、毛、硝鹽
二五、アニリン色素染色法	ビーカー、砂皿、三脚臺、アルコールランプ	布、色素、硫酸ソーダ
二六、石鹼ノ鑑定	水槽、	石鹼、梅醋、フェノールフタレン

二七、硬水、軟水	水槽、	石鹼、水、生石灰、硫酸マグネシウム
二八、假漆ノ使用法	朱ニテ文字ヲ書キタル塗物筆	假漆
二九、テレピン油ノ使用法	樹脂ノツキタルモノ	テレピン油
三〇、アルコールヲ清酒ヨリ蒸溜ス	フラスコ、酒精燈、ガラス管、コルク、試験管、ビーカー	清酒
三一、雞卵ノ鑑定	……	雞卵
三二、牛乳ノ鑑定	浮秤、フェーゼル氏檢乳計	牛乳、沃素、アルコール
三三、蛋白質ノ反應	試験管及試験管挾、アルコールランプ	牛乳、雞卵硝酸、アルコール
三四、手製ラムネ法	ラムネ瓶	砂糖、水、枸橼酸、重曹
三五、醋酸ノ性質及醋ノ製法	試験管	鉛、リトマス液、醋酸、酢、腐敗酒
三六、消毒用石炭酸ノ作り方	試験管、刻度圓筒、アルコールランプ	石炭酸、水

生徒實驗要項 物理之部

實驗事項	用具
一、鉛直ノ方法	錘、糸、
二、重心	不規則板、糸、錐
三、物體ノ顛覆	箱、瓶、不倒翁
四、挺子	鋏、ピンセット
五、槓杆	尺、錘、鉤、
六、滑車	定滑車、動滑車、
七、斜面	斜面及附屬品
八、液體壓力ノ傳達	細孔ヲ有スルゴム毬
九、液體ノ上壓	上壓試驗器

一〇、液體ノ側壓	側壓試驗器
一一、氣壓	水槽、試験管、水、
一二、氣體ノ壓縮性	フラスコ、ガラス管、コルク
一三、空氣ポンプ	空氣ポンプ、膀胱、マグデブルグ半球
一四、サイフォン	硝子管ニテ製作ス、水槽
一五、霧吹き	霧吹き
一六、毛管現象	布、鳥ノ羽毛、水
一七、固體ノ比重測定 注	天秤、水槽、金屬板又ハ小石
一八、浮秤	水、アルコール、牛乳、浮秤
一九、慣性	銅貨、厚紙、コップ
二〇、遠心力	糸、コップ、水、針金
二一、振子	糸、錘、

二二、音	糸、針金、鈴
二三、共鳴	音叉二本、圓筒、水
二四、管	玩具ノ笛、種々
二五、寒暖計、檢温器	寒暖計、檢温器、水、酒精燈
二六、氣體ノ膨脹	ゴム、球、火鉢、フラスコ、硝子管、コルク
二七、熱ノ傳導	火箸、鋏
二八、熱ノ對流	ビーカ、水、炭粉、アルコール燈
二九、熱ノ輻射	火鉢、厚紙
三〇、氣化ノ潜熱	エーテル、ビーカー、試験管、吹子、水
三一、光ノ直進	細孔アル厚紙、蠟燭
三二、光ノ反射	平面鏡、凸凹面鏡、蠟燭
三三、光ノ屈折	茶碗、銅貨、水

三四、凸レンズノ焦点及像	レンズ、蠟燭、ピンセット、尺度
三五、凹レンズノ虚像	凹レンズ
三六、蟲眼鏡	蟲眼鏡
三七、光ノ分散	七色獨樂、プリズム
三八、磁石ノ感應作用	棒磁石、縫針
三九、發電	エポナイト棒、フランネル、硝子棒、絹、電氣振子、燈心
四〇、電流針	電池、磁針、導線
四一、電池	圓筒、銅、亞鉛、稀硫酸
四二、電磁石	電磁石(キーパー付)乾電池

博物科

86

第一 學習の目的

博物を學習する目的は重要な天然物に關する一般知識の收得及び其相互並に人生に對する關係と人体の構造生理及び衛生の主要とを理會し兼て日常生活に資するにあり

第二 學習上の注意

○動植物學

一、地球上無限なる動植物につき研究するは極めて難し故に先づ一群を代表するに足る主要なるものを選択して之により其形態、生態並に人生との關係を學習し以て他は多く考究推察するなり教科書は此主旨に據りて編纂せられたるものなれば之を無視せず平素充分に熟讀玩味すること最も肝要なり。

二、教科書の精讀玩味は動植物學習上最も必要なる條件なるも余りに之に捉はるべからず教科書には單に其形態のみを説きて生態並に人生との關係を除きたるあり或

は其の形態、生態を略して只人生に對する關係のみを記したるありて一定せず之れ教授時間の限定上已むを得ざることなるも動植物を學習するには必ず其形態、生態並に人生に對する關係の三方面より觀察考究すべきものたることを忘るべからず。

三、動植物を學習するには實物實地につき充分に觀察實驗すること最も肝要なり標本若くは繪畫にての研究は何物もなく學ぶよりは勝れたれども實物にての學習に比すれば其價值極めて少し故に平素學習すべき材料の採集、捕獲に大に努むべきなり。

但毒草、毒虫等の採集には充分の注意を要す

四、動植物を實物又は實地につき觀察實驗する場合は只に教科書に記載せる事項或は教師より指定せられたる條件の知識收得するのみならず自己の全能力を發揮し所謂發見的態度を以て自由に他方面をも觀察實驗し其疑惑の箇所は明記し置きて充分に質問考究すべし。

- 五、動植物を観察実験するときには全体若くば部分につき其形、色、光澤、大小、長短及表面の状態等に能く注意すべし。
- 六、動植物の各部分は共通の點を有すると共に又種々の變形變態をなすものあり能く注意して観察するを要す
- 七、動植物が自然の現象に對する變化反應をも亦留意考察すべし。
- 八、動植物の全体又は各部分の作用、發生より枯死するまでの経過及種族の繁殖等も亦注意して觀察考究すること必要なり。
- 九、動植物を原料としたる人工品、加工品等には特に留意觀察すること肝要なり
- 一〇、實驗、觀察及び考究せし事項は圖書又は文章を以て必ず明確に記し置き正課若くは復習のときの資料となすべし。

○鑛物學

- 一、鑛物を學習するには其性狀、産狀及び人生に對する關係の三方面より觀察考究すべし。

二、鑛物の性狀を學ぶには先づ其名稱を知り次に岩石なるか鑛物なるかを區別し岩石ならば火成岩なるか水成岩なるか又鑛物ならば結晶質か非結晶質か金屬性か非金屬性かを觀察實驗すること肝要なり。

三、比重、硬度、色、明暗、光澤、條痕及斷面等を注意觀察すること必要なり

四、熱、光、電氣、酸、アルカリ及び炭素等に對する變化にも亦注意して考察することを要す。

五、産狀を學ぶには地理と連絡して實地につき其成因を觀察すること必要なれども實行甚だ困難なり故に平素旅行等をなす場合に注意して觀察することを怠るべからず。

六、人生との關係に就ては左の事項に注意すべし

- 1、如何なる所に用ひらるるか。
- 2、自然産出のままにて用ひらるるか。
- 3、機械力を加へて如何に用ひらるるか。

4、精煉して如何なるものになるか。

七、観察實驗せし事項は圖書又は文章もて明記し置くべし。

○生理學

一、人類は一個の自然物なるを以て人体全部或は各部の構造、作用及び衛生を留意考察し實際生命の保全をはかること極めて肝要なり。

二、先づ自己の身体につきて其構造、各機的作用等を留意觀察し次に標本、模型、繪畫等にて更に考究して以て衛生に注意すること最も必要なり

三、運動器、消化器、循環器、呼吸器、排泄器、神経系及び感覺器等に能く注意して其常態のときと病態のときとを比較考察することも亦肝要なり

四、觀察考究せし事項は必ず明記し置くべし

五、生理學は家事科、体操科の基礎的知識なることを忘るべからず

法制經濟科

第一 學習の目的

一、法制經濟の意義

- 1、法制とは一國の法令制度を總稱するの義にして人事關係に於ける規則一切を包含す
- 2、經濟とは吾人が慾望を満足せしめんために外界の財を獲得し且つ之を利用せんとする秩序的活動をいふ

二、法制經濟學習の目的

法制經濟の知識は吾人日常公私の生活上に必要なものなれば、苟も國民たるものは其の身分職業の如何を問はず、是等の知識を要するや切なり、殊に中等教育を受けて將來國家の先覺者となるべき國民にありては、法制を學びて遵法の實を擧げ、且つ經濟の理法に通じて、一家一國の繁榮富強を圖り進んで國權を擴張し國運の發展を促し、以て忠良の臣民たらんことを期すべし。

第二 學習上の注意

- 一、法は知らざるの故を以て其の罪を免るることを得ず國民たるもの國法の大要に通せざるべからざる所以を忘るべからず。
- 二、日常生活上の事實に基きて理論を理解すべく例を卑近に求むべし。
- 三、法制と社會との關係に注意すべし。
法の格言に曰く「法は社會の爲に發生し社會の爲に存在するものなり」
- 四、法制と經濟との間に左の如き關係あることに注意すべし。
 - 1、經濟は法制に左右せられ法制の保護を受けて發達す。
 - 2、經濟の發達は法制に影響して其の發達を促かす。
 - 3、現今の法制は大半其の制定につき經濟上の理由を有す即ち經濟的立法なり。
 - 4、經濟的法制の活用は國民の經濟的知識に待つ然らずんば却つて之を徒法たらしめ或は之を惡用するに至る。
- 五、法制と道德との間に左の如き關係あることに注意すべし。

相異点

- 1、目的を異にす。(正と善)
- 2、支配する所を異にす(行爲と心意)
- 3、形式を異にす(強制と任意)
- 4、往々衝突することあり奴隸制度の如し。

相關点

- 1、道德は法制の基礎の大部分を構成す。
 - 2、兩者は合致するを以て理想とす。
 - 3、未開の時代には兩者は混合して分化せざりしものなり。
 - 4、法制の善良なる發達の爲には國民の道德の健全なる發達を要す。
- 六、經濟と道德との間には左の如き關係あることに注意すべし。

- 1、今日は信用經濟の時代なり、従つて其の圓滿なる發達進歩は道德を前提とす。
- 2、道德を圓滿に行ふには經濟力を要す。

石、空の色に至るまで、あらゆる自然の美妙なる色彩は、生活の爲に疲れたる人々の心に、平和と休息と慰安とを與へ、其勢力を恢復して活動の力を増進するの偉効あるものなり。

四、工夫力、想像力を練磨し意匠、發明等の構想力を養成するにあり。

寫生畫に於ても、考案畫に於ても、位置、形狀を定むるに種々の工夫を要し、模様、創作、色彩の配合に、幾多の苦心想像を逞うして後始めて成就する者にして、之等は懸て種々の工夫發明等の動機となり、併せて緻密、正確、清潔等の良習慣を養ふを得るなり。

五、美術工藝品の眞價を知りて其の發達を計り且之に對する趣味を養ふにあり。

製作に苦心せる經驗有るものにして始めて他人の作品に同情を生じ其の眞價を知るとを得べし。而して優れたる美術工藝品の創作は、國家富強の一因たることを理解して、之に對する趣味を養ひ、其の進歩發達を計らざるべからず。

六、美的感情及鑑賞力の發達により日常生活を向上せしむるにあり。

日常生活に必要なる機械、器具、衣服、裝飾品、書畫、建築物等の新調、賣買、貸借等の取扱をなすに當り、批判力を有せざれば其の眞價を知る事難し、故に其の取捨、選擇、批判鑑識の力を養ひ、以て一家の生活を、高尚優雅にし、且つ幸福ならしむるにあり。

第二 學習上の注意

一、美の要素即變化統一、均齊、平衡、適合等の諸要素は、形體、色彩の描寫、或は考案、創作等をなすに當りて、常に忘るべからざる要件なり。

二、色彩に就て常に記憶すべき要項を擧ぐれば次の如し

1、色の分類

A、三原色。

青、黄、赤

B、三間色。(二次色)

原色の混合によりてなるもの

C、三次色。

間色の混合によりてなるもの

2、色の明暗。

A 全濃色。 一定の濃さを有する色

B 明色。 全濃色に水又は白繪具を加へたる色

C 暗色。 全濃色に墨汁又は黒繪を加へたる色

3、色の寒暖とは表情的感想より見たる色の分類なり。

A 暖色。(温色、陽色) 白、赤、黄、橙色

B 中性色 緑、赤紫

C 寒色 (冷色、陰色) 黒、青、紫

4、色の調和とば二色相又は數色相を並べて見る場合の反應的見映が、快感を興ふる場合は、之を調和せる色彩なりと云ふ。

配色に次の種類あり。

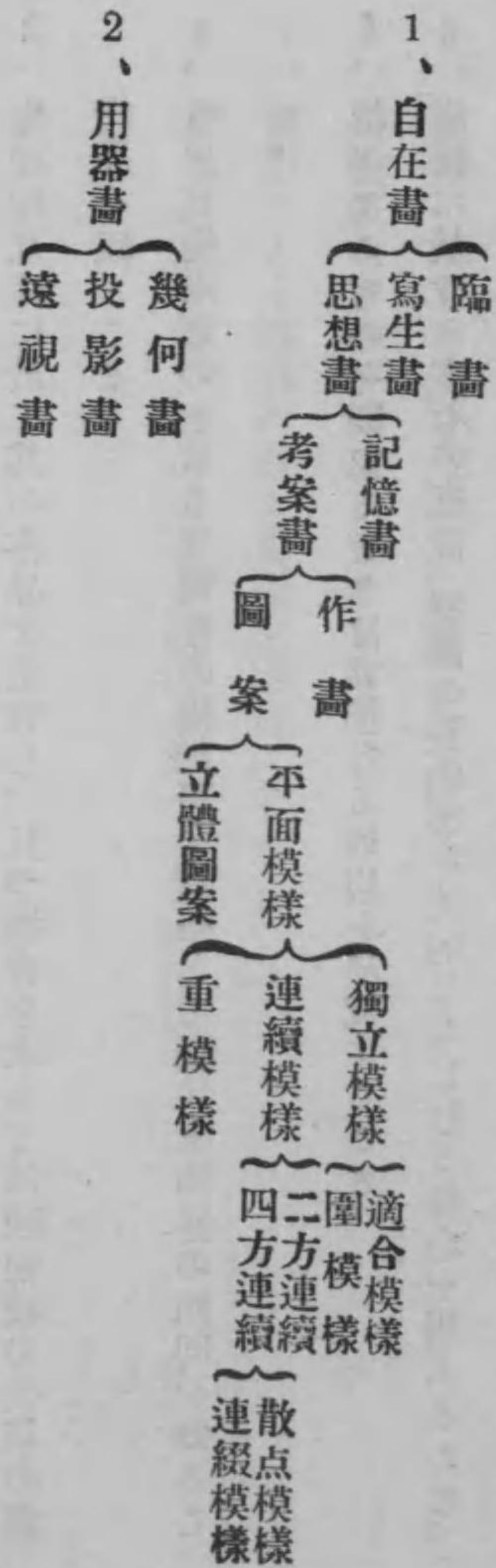
A 補色の配合。 赤と緑の如し。

B 同種色の配合。 淡紫と紫と濃紫の如し。

C 類似色の配合。 黄と橙色の如し

D 對立色の配合。 黒と白の如し。

三、圖書は其の描法によりて、日本畫、西洋畫の區別あれども、高等女學校にありては、専門家を養成するにあらざれば、何れも其の概略を學習するものとす。圖書の種類を表示すれば次の如し。



自在畫は寫生及思想畫を主とし時々臨畫をも學習すべく、用器畫は主として幾何畫を學習するものとす。

四、鑑賞力を進むる法

- 1、成る可く多く古今東西の大家の作品に接して其妙所を賞翫すること。
- 2、店頭の裝飾、廣告の圖案、メタル、織物、陶器の模様等、總ての物を審美眼を以て觀察し、其の色彩、形態につきて研究すること。
- 3、生徒相互間に於て其の作品を批判し、且つ機會を求めて他級他校の生徒の成績品を観ること。
- 4、帝展其他兩京の主なる展覽會の繪端書を賞觀して現代美術界の傾向を知ること。
- 5、拙劣なるものを觀たるときは其拙なる所以を研究すること。
- 6、庭園に於ける木石の配置、室内の裝飾等を美的ならしむる様心を用ふること。
- 7、花鳥、山水、人物を問はず、見る毎に感ずる毎に、自由に大膽に發表を試ること。

五、描法上の注意

- 1、位置、輪廓、色彩の濃淡、遠近法、陰翳等に細密なる注意を怠べからず。
- 2、消ゴムは成る可く用ひざるを可とす。
- 3、畫稿は必ず教師の批判助言を仰ぎて更に研究を重ねべし。
- 4、彩色は必ず一度他紙に試みたる後着手すべし。
- 5、日本畫に於ける線は單に區劃的線となることなく必ず有意的のものなるべく沒骨に於ては其墨色、色彩の潤澤を尊ぶべし。
- 6、姿勢に注意し、机上は常に整頓すべし。
- 7、用紙を汚さぬやに描き上げべし。
- 8、畫様により姓名の書き場所を適當にすべし。
- 9、繪具の溶き方、墨の磨り方は滓を生せざる様注意すべし。

家事科

第一 家事の範圍

吾人の家を對象として之を整理し幸福ならしむるための一切の仕事即ち衣、食、住衛生、養老、看護、育兒、家事經濟等に關する知識技能を習得する學科なり。

第二 學習の目的

- 一、家事的の知能を運用し理會的、合理的、自覺的なる家庭生活を營み其の能率を増進せんとするにあり。
- 二、家事的訓練に依り勤勉、節儉、秩序、周密、清潔の良習を養ひ且つ家庭生活の趣味を養ふこと等によりて家を愛して意義ある家庭生活をなし、更に之を向上發展せしめ以て健全なる國家の基礎を作らんとするにあり。

第三 學習上の心得

- 一、發動的なるべし。

- 1、發動的の態度にあらざれば到底充分なる理解を得難し故に生徒は常に獨立したる研究者の位置に立ちて自ら問題を解決するの覺悟なかるべからず。
- 2、豫め學習事項を心得おき一々教師の指導命令を俟たず自ら攻究をなす様心掛べし。

二、創作的なるべし。

- 1、他人の研究の結果を器械的に模倣することなく科學的に考察し更に之を基礎として演繹的に家庭生活上の事實を思考すべし。
- 2、家事科の範圍は廣し學校に於ける一定時間のみにては不充分なるを以て參考となるべき書籍、雜誌の講讀家庭に於ける實習實驗等によりて之を補ふべし。
- 3、生徒相互の批評攻究は創作力を養ふべき好機會なることを忘るべからず。

三、努力的なるべし。

- 1、勤勞面倒を嫌ひ、安逸に流るるが如きは本科學習の目的に反するものなり。

- 2、努力には可成り苦痛を伴ふ、然れども努力を好むものは、苦裡に快感を味ふ、
 - 3、目的を定め方針を立てて後に進め。
 - 4、仕事を自己に統一せしめつつ進め。
 - 5、独立し又協同して務めよ。
 - 6、科學と常識とを利用せよ。
 - 7、成る可く文明の利器を利用して能率の増進を圖れ。
 - 8、習慣を利用すると共に之を理論的になし無意義の働をなさぬ様心掛くべし。
 - 9、身身的條件を活動に適する様にせよ。
- 第四 實習心得**
- 一、數人聯合せる實習は他人のなす部分も、尙自己のなす部分と同一の態度にて注意せざるべからず。
 - 二、教師の示範的技術を主觀化して充分よく會得せざるべからず。

- 三、實習後の後始末を怠るべからず。
- 四、實習の成績は生徒相互充分に批評攻究せざるべからず、自分自身は完全なりと思ふ成績にても他人の批判を容れて参考となすの心掛なかるべからず。
- 五、實習の後は教師其の他の批評に鑑みて反省し、方法、順序技術的呼吸の上に如何なる缺陷ありしかを省みざるべからず。
- 六、實習に於ける方法並に結果を記載して後の實驗の参考に供せざるべからず。
- 七、模倣的なる技術に陥らず知識に基きての技術化を重んずべし。

裁縫科

106

第一 學習の目的

衣服の裁方縫方を研究し生活上必須なる實用的の技能と衣被料に關する衛生、經濟等の思想並に審美的感情を養ひ綿密、清潔、整頓勤勉等の良習を得るにあり。

第二 學 習 法

- 一、運針は縫方の基礎をなすものなる故上達の後と雖もろの練習を怠る可からず。
- 二、六ヶ敷部分は部分縫にて工夫もし練習もして技術を固定すべし。
- 三、指導書及び標本に依り自動的に直觀に訴へ明瞭に了解して之を模倣するのみならず進んで工夫を凝すべし。
- 四、縫方、裁方のみならず疊方、保存法、解き方、洗ひ方等をも家庭に於て實習すべし。
- 五、仕立上ぐる着物の服地、染色、性質、産地、價格等を知ること力ひべし。
- 六、單に表面の成績の良否にのみ重きを置かずして理解力、工夫力を進むることに留意すべし。

意すべく機械的の模倣を避くべし。

- 七、他生の質問し又は指導を受くる事項にも注意して活きたる知能の獲得を期すべし
- 八、裁つ場合には必ず先づ圖解し經濟的方面と体裁的方面の二方面より考究して然る後決行すべし。
- 九、裁縫上主要なる知識は充分に理會し且つ之を記憶して運用自在の域に達せんことを要す。
- 一〇、常に緊張(針)を持ちて心の綻を縫ふ事に努めよ。

107

音 樂 科

108

第一 學習の目的

音樂は感情の言語にして之を好むは人間の天性なり日夕唱ひ彈する間に不知不識其の歌詞及び曲節に表れたる純正の感情に觸れて心情を純潔高尚ならしむるものにして、直接には趣味を高め道德的情操及び國民的情操を養ひて間接には卑俗を惡み醜惡を遠ざけ言語の基礎たる發音を正しく且つ美しく更に善良なる意志の發動を促すものなれば之が學習に力めざるべからず。

第二 學習上の心得

- 一、略譜及び本譜の兩種を學ばざるべからず、前者は簡略にして五線紙なきも作曲或は聽寫に便に後者は完全にして世界的なり長所あればなり。
- 二、讀譜力を養はざるべからず。
完全なる樂譜を記載せる教科書により數理的に或は筋覺發聲に訴へて自ら階名を

稱へ、音程を考へ、拍子を整頓する等自動的に研究して讀譜力を養はざるべからず。

三、姿勢は胸を壓するとなく自然にして何等の束縛なく心は伸びくして飾氣なきを要す。

四、歌曲に移る基本的教練たる發聲練習を重視せざるべからずその方法は

1、低音は腹より、中音は胸より、高音は頭より出す心持にて發聲すべく而して鼻腔・口腔に共鳴せしめざるべからず。

2、發聲を練習しつつ音程に注意し呼吸の永續に留意すべし。

五、卑俗に傾きて詩趣を喚起し難き樂曲、歌詞は絶対に用ふべからず。

六、歌詞の眞意の了解に意を用ふべし。

七、教授を受くる際和聲をも理解し不知不識の間に趣味の向上を計らざるべからず。

八、唱歌の際は現在の自己を擲ち歌詞歌曲そのものになりて然も偽りなき自己の眞情個性を發揮すべし、斯くて何等の束縛なく自然より自然に自在に歌ふと奏づること

109

を得べし。

九、自然に對せし時或は喜の時悲の時等心より進り出づるメロディーは直に略譜によりて作曲すべく更に進んで指導を受くべし。

十、自然のあらゆる音を美しきメロディー、ハーモニーに美化し得る迄の發達を期すべし。

十一、空想に耽り感情的に陥らざる程度に於て學習すべし。

体操科

第一 學習の目的

- 一、全身の健康を増進し。
- 二、身体各部の均齊なる發育を圖り。
- 三、四肢の動作を機敏にし。
- 四、精神を快活ならしめ。
- 五、兼ねて規律を守り協同を尙ふの習慣を養ふに在り

第二 學習上の注意

- 一、健康なる身体にあらざれば健全なる精神の宿らざることを思ひて自發的に自己の健康増進を圖るべし。
- 二、自己身体の特質を自覺し健康の保護増進上適當なる方法を講すべく運動の種類分量並に休息睡眠營養等に注意すべし。

- 三、各種運動の目的を明にして其の効率増進を圖るべし。
- 四、体操の目的は主として身体各部を普遍的に活動せしめ均齊なる發達を遂げ動作の熟練敏捷を期し体力の鍛鍊をなさんとするにあり。
- 五、教練の目的は規律を守り協同を尙び勇敢剛毅なる精神を養ふにあり。
- 六、遊戯は自由にして自發的なるを特長とし全身の健康を増進し感覺機關並に運動機關を鍛鍊し個性の發達に資し協同心、自治心を養ふにあり。
- 七、戶外運動としては遠足、登山、ローンテニス、インドアベースボール、キャプテンボール、バレーボール、フリーボール、デッドボール等をなすべし。
- 八、体操に於て習成せる姿勢は平素に於ても之を保たんことを要す。
- 九、身体上に特別の事情あるときは教師の許を得て遠慮なく体操科の受業を休むべし。
- 十、服装は運動に適するものを用ふべし。
- 十一、時々自身長、体重、胸圍等を計り徒歩駈足等の速度を記録して体育上に資すべし。

大正十年六月十五日印刷
大正十年六月十七日發行

(非賣品)

發行所 長崎縣大村高等女學校

長崎縣東彼郡大村五百十番地

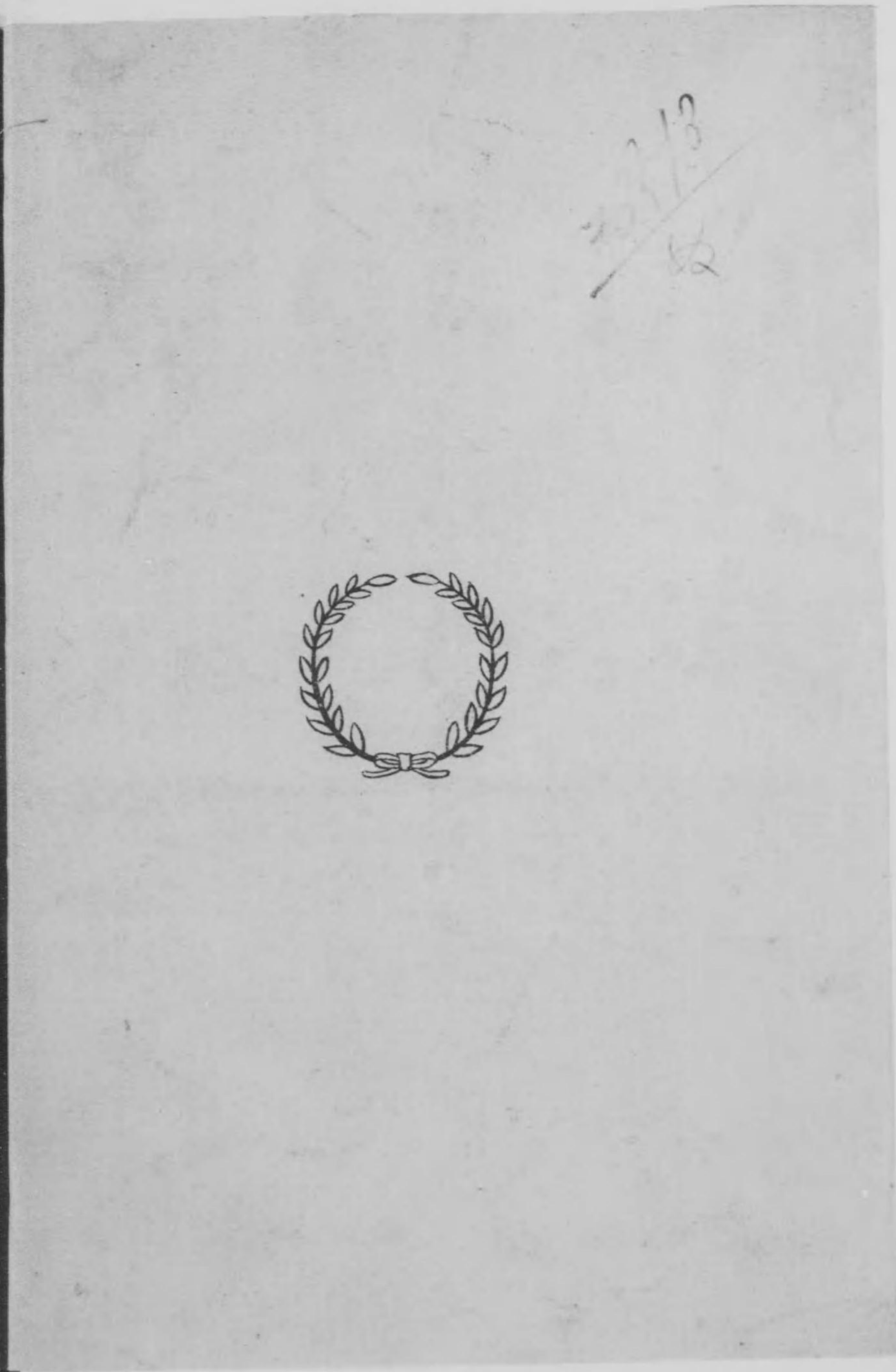
編輯者兼 發行者 鹿 島 清 治

長崎市今町九番地

印刷者 喜 多 璋 太 郎

長崎市今町九番地

印刷所 喜 多 活 版 所



279

36

終

